

P-3 上顎左右乳犬歯部に過剰歯及び双生歯を有する一症例

○勝俣 真里 久保山博子 石井 香  
小笠原 靖 本川 渉  
福岡歯科大学小児歯科学講座

小児歯科臨床において真性乳歯過剰歯、特に犬歯部における報告は極めて少ない。又、乳歯双生歯も犬歯部では稀とされている。

今回演者らは、上顎左右乳犬歯部に真性乳歯過剰歯及び双生歯を有する症例に遭遇したので報告する。

症例：昭和58年 9月29日生まれ 男児

初診：昭和62年 6月19日 3歳9カ月

主訴：齲蝕処置希望

家族歴：特記事項なし

既往歴：満期出産で自然分娩であった。出生時体重3470g, 身長51cmでその他特記事項はない。

全身所見：初診時身長99.7cm, 体重14.0kgであり体格栄養状態ともに良好であり、その他特記事項はない。

口腔内所見：現存歯は $\frac{EDCBA|ABCCDE}{EDCBA|ABC DE}$ であり、Hellmanのdental ageはIIAであった。上顎左側犬歯部に過剰歯を認め、 $\underline{CC}$ いずれも歯列上に萌出していたが、 $\underline{C}$ 遠心面側が唇側に捻転していた。又上顎右側犬歯は双生歯であり歯列上に萌出している。

X線所見：口内法によるX線写真では $\underline{C}$ の歯冠および根の形態は類似している。 $\underline{C}$ 部の双生歯は反対側の $\underline{C}$ とほぼ近似した形態で幅径が大きく、癒合線と思われる不透過像が認められる。

P-4 乳臼歯髓床底部における副根管に関する研究(Ⅳ)-乳臼歯髓床底部及び根分岐部副根管のSEMによる観察-

後藤讓治, ○加島知恵子, 中村則子, 細矢由美子  
長崎大・歯・小児歯

目的：臼歯根分岐部に髓室から歯周組織と交通する副根管が存在することは知られているが、乳臼歯における副根管についての報告は少ない。演者らは、走査型電子顕微鏡による乳臼歯髓床底部における副根管の観察を行い、第7回日本小児歯科学会九州地方会大会及び第28回日本小児歯科学会大会において報告した。今回はこれらの所見の総括ならびに、これまで全く未知であった乳臼歯副根管の垂直断面部のSEMによる観察について報告する。

方法：本研究に用いた試料は、インド人小児の頭蓋骨10顆の下顎骨より得られた乳臼歯39歯である。被検歯の歯列はいずれもHellmanの咬合発育段階II Aの状態であった。被検歯は八木の基準に従い、歯軸を決定した後、根分岐部から根端側1.5mmの部位と歯頸部より歯冠側5mmの部位で歯軸と直角に切断した。被検歯を10%次亜塩素酸ナトリウム溶液中に浸漬し、次いで1.5%過酸化水素水で中和した後、洗浄、脱水、金蒸着を行い、走査型電子顕微鏡(日立S-520)を用いて、乳臼歯の髓床底部及び根分岐部に存在する副根管の観察を行った。次いで同試料を近遠的に切断し、副根管の垂直方向断面部のSEMによる観察、並びに写真撮影を行った。

結果：1)乳臼歯39歯中14歯(35.9%)の髓床底部に39個の副根管の発現を認めた。副根管を有する歯牙1歯あたりの発現個数は最大10個、最小1個、平均2.8個であった。2)他方、根分岐部方向からの観察では、乳臼歯39歯中33歯(84.6%)、182個の副根管の存在が認められ、1歯あたり最大20個、最小1個、平均5.5個であった。3)副根管の開口部の形態は円形が最も多く、次いで楕円形であった。4)副根管は同一個体左右同名歯に発現する傾向が認められた。5)副根管の発現には個体差があり、副根管が多数歯に存在する場合と、全く存在しない場合があるように思われた。6)乳臼歯副根管の垂直断面部のSEMによる観察によって、新発見が得られた。